

9月初めには「KUMAMOTO KENDAMA DAY」での熊本けん玉チャンピオンシップ、そして10月初めには「ちびっこ相撲大会」が開催され、希望した子どもたちが参加しました。会場には他の園や地域からもたくさんの参加者や応援の人が集まり、子どもたちはその熱気に圧倒されていました。

私も子どもの頃に似たような経験があります。小学校1～2年生のころ、長野県の諏訪という所に住んでいて、冬には学校の授業でアイススケートが行われていました。そこそこ滑ることができた私は、学校から案内のあったスピードスケート大会に申し込みました。ところが当日、会場に行ってみると、マイシューズにタイト姿の「本格派」ばかり。すっかり気おくれしてしまい、「やっぱり出ない。帰ろう……」と母に言って帰ってしまいました。翌日、友だちから「あれ、朝は来てたよね？」と聞かれ、「ちょっと具合が悪くなって」とごまかしたのを覚えています。今でも、「負けてもいいから、出ておけばよかった」とあの時の後悔が心に残っています。

そんな自分の体験を思い出しながら、けん玉や相撲に挑戦する子どもたちを見ていると、「出てみよう」「やってみよう」と踏み出す勇気の大切さを感じます。緊張で身体が固まってしまう子、試合に負けて泣いてしまう子、思うように結果が出せずにくやし涙を流す子もいました。でも、その涙は決して弱さではありません。むしろ、がんばったからこそ、くやしい。うまくいかなかったからこそ、次はもっとできるようになりたいと思える。その「くやしい気持ち」は、子どもが自分自身の力で前に進もうとするエネルギーになるのだと思います。

私は、ボランティアで「IPAくまもと」という団体の代表もしており、プレイパークや冒険遊び場の考え方を広めたいと思っています。今はどこに行っても「あれをしてはダメ、これをしてはダメ」と言われることが多く、子どもたちが自由に遊ぶ場が少なくなっています。その背景には、ケガなどの責任をだれが取るのかという責任問題があります。そこで、日本初の職業プレイリーダー・天野秀昭さんは、「自分の責任で自由に遊ぶ」という言葉を掲げています。やらされる遊びではなく、「自分でやってみよう」と思うことにこそ、子どもが本気になれる時間があるという考え方です。誰かに指示されたことではなく、自分の意思で挑戦したとき、子どもは初めて「うまいかない」「くやしい」「でもまたやってみよう」といった感情を全身で味わいます。そこには、大人が与えようとしても与えられない、本物の成長の芽があるように思います。

「自分の責任で自由に遊ぶ」とは、放任ではなく、子どもを信じるということ。失敗も含めて自分の経験として受け止める力を育てることです。大人が先回りして危険を取り除いてしまえば、安全かもしれませんが、子どもの心には「自分でできた」という手ごたえが残りません。転んでも、泣いても、自分の足で立ち上がる。そのくやしさを糧に、また一步を踏み出す。

くやしい気持ちは、次につながる力になる。

それは子どもだけでなく、私たち大人にも通じることかもしれません。これからも、子どもたちが自分の意思で挑戦し、涙のあとに笑顔を取り戻せるような場を、みんなで見守りながら育てていきたいと思っています。

